

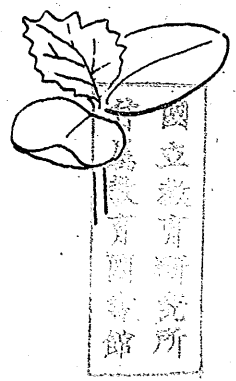
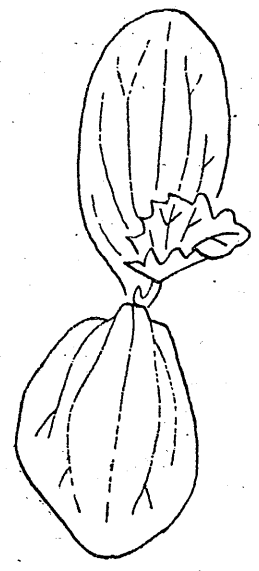
文部省著作教科書

國語

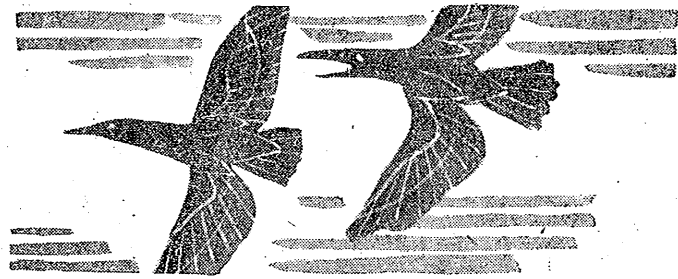
第六学年
下



15



國語 第六學年 下



もくろく

一 まさに立つべし……………四

矢と歌

朝ざくら

みかん

わか草

月夜

ばらの花

まさに立つべ

二 大わしに乗った話……………十九

三 文字の話……………三十四



文字のはじめ

漢字

かな

ローマ字

日本語の書き表わしかた

四 めぐりあい……………四十三

赤絵のはち

熱情のことば

五 その人のことば……………七十七

六 幸福の園……………八十二

七 最後の学級日記……………百二十



一 まさに立つべし

矢と歌

空にはなちし わがそ矢は、
あわれいずこに 落ちにけん。
ときいきおいに まなこすら、
その行く末を 見ざりけり。

空になえし わが歌は、



あわれいずこに 落ちにけん。
いかに目ざとき 入とても、
声の行くえの 見えんやは。
遠くそののち かしの木に、
矢はまだおれて とどまりぬ。
歌のもと末 ふたたびも、
友の心に あらわれぬ。



朝ざくら

だいたいは実をたれ時計はカチカチと

朝ざくらみどり子にいうさようなら

家を出て手をひかれたるまつりかな

六つほどの子がおよぐゆえ水わかな

冬の水一枝の影もあざむかず

うしはしずかにおのおのの大きな耳をむけぬ

みんてききりの中鉄のひびきのかじ屋の火

息白しいつまで残る明星ぞ

さい晩や火のこ豊かの汽車けむり

影絵めく牛馬朝日を織るあきつ



み
か
ん

みかんむこうと手ぶくろをぬぐ山ふかく

さくらさくら人が人が子を歩かせて

かわずだまりて人の足大きくすぐる

きみわれ口そそぐ朝のそここの小流れ

水はしずかに流るると見ればもの花

こどもら手をつないだ中を日ぐれのうまが通る

はまの子ら火をたく青き月夜となり

うまよ人間のかさから耳をだして

まんじゅしゃげおりすてである道のまんじゅしゃげさき続く

子どもみんな早口に話しつつ来る子どもと子ども

日の第一線が燈台の高きに

れんげつみて子といふ母の黒いこもり

月が出る山の家にうしをつないだ木

わか草

荒れ庭にしきたる板のかたわらにふるばちならび赤き花さ

く

いけがきのすぎの木いくみとなり家の庭の植え木の青めふ

く見ゆ

ばらの木の赤きめをふくかきの上に小さき虫の出でてとぶ

見ゆ

人の家にさえずるすずめガラス戸の外に来て鳴け病む人のために

わか草のはつかにもゆる庭に来てすずめあさりてとなりへとびぬ

ガラス戸の外にかいおく鳥の影のガラス戸すきてたたみにうつりぬ

月夜

ほととぎす鳴くに首あげガラス戸のどのも見ればよきつ
くよなり

ガラス戸の外にすえたる鳥かごのブリキの屋根に月うつる
見ゆ

ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびける見ゆ
ガラス戸の外のつくよをながむれどランプの影のうつりて
見えず

紙をもてランプおおえばガラス戸の外のつくよの明らけく
見ゆ

あさき夜の月影清み森をなすすぎのこぬれの高きひくき見
ゆ

夜のどこにねながら見ゆるガラス戸の外明らかに月ふけわ
たる

照る月の位置かわりけん鳥かごの屋根にうつりし影なくな
りぬ

月照らす上野の森を見つつあれば家ゆるがして汽車ゆきか
える



ばらの花

大きなるべにばらのひと花思わぬをゆらら
にあかく開き満ちたる

目をあけてつくづく見ればばらの木にばらがまっかにさい
てけるかも

風くればばらはたちまち火となれりゆれにゆるるか照りそ
う風に

おどろきてわが身も光るばかりなり大きなるばらの花照り
かえる

ただみればこれかりそめのばらの花おどろきて見ればその
花動く

ひるすぎていよよにあかきばらの花いよよに重くかたむき
ふかむ

大きなるなにごともなきばらの花ふとのはずみにくずれた
りけり

まさに立つべし

少年たちよ、

野にはたらきて、

土ほこり

顔よごすとも、

わするるな、

明かるくすめる

ながえ顔。

少女たちよ、

花そだてつつ

あきないて、

つづれ着るとも、

失うな、

やさしく清き

なが心。

わが祖國、

やがて立つべし。

きみたちの

そのまともなる

ひとみもて。



ああ、日本、

まさに立つべし。

きみたちの

そのやわらかき

たなごころもて。



二 大わしに乗った話

ヨーロッパのアルプスの山々のうち、もっとも高い山の一つに、ユングフラウという美しい山があります。スイスの首府のベルンの町からながめると、まっ白に雪をいただく山々がならび立っています。その中で、一だんと高くそびえているのが、このユングフラウの山です。これは、富士山よりはすこし高く、四千百七十メートルばかりの高さがありますが、そのほとんどいただきまで高山植物のさきみだれているけいしや面を、あるいは、氷河が無言の流れをききこんでいる深い深い谷の上を、登山電車がわれわれを運んでいってくれます。

その登山電車のどちゅうにはいくつかの停車場があつて、そこには、氣持のいい、小さなホテルがここかしこに立っています。

ある夏のことでした。このユングフラウの山中のホテルに、アメリカ人の一家族が来て、しばらくとまっていました。両親と子どもふたり、ひとりは男の子で八つ、ひとりは女の子で四つになるかわいい子どもたちでした。それに、この子どもたちを世話する、ひとりの女の家庭教師がついていました。

朝の十時と午後の三時ごろと、日に二どずつ、このふたりの子どもたちは、両親や家庭教師につれられて、散歩に出て來るのでした。ニューヨークの大会で育てられた子どもたちには、このヨーロッパの高い山の中の生活は、見るもの聞くものがこ

とごとくめずらしく、ゆかいな楽しいものでした。

朝ぎりの中から、白い雲のわきたつように、すべり出るまっ白なひつじのむれ、朝風にひびくすずの音、日光にかがやく高山植物のかおり、その上に、まっ白な服をつけた少女の立っているようなけわしい山が、むらさきがかった大空の下に、わらうようにそびえているのでした。

ある朝、このアメリカ人の家族は、いつものように散歩に出ました。ふたりの子どもは家庭教師につれられて、めずらしい草花をつみながら、がけの上をそろそろと歩いていました。男の子は、小石を見つけては深い谷の中へなげこんで、それがコトコトと音をたてて下の方まで落ちていくのを、おもしろそうに見ていました。女の子は、あぶない足どりで、山の上の方に、

また下の方にちらばっているひつじのむれを追いでもするよう
に、とかく家庭教師の手からは
なれて行きそうにいました。
そのとき、ふいに、みんなの
頭の上が暗くなって、なんだか
大きなあらしがふき起ったよう
な音がしました。

なんでしよう。みんなが、お
どろいてその音の方へ顔を向け
て見ると、三メートルもあるよ
うな羽をひろげた大きな一わの



やまわしが、サアツという羽音をたてて、空中に風をまき起し
て、みんなの上へ舞いおりて來ます。「わっ」という声をたてて、
みんな草の上へひれふすように、思わずたおれてしまいました。
しばらくして、ふと氣がついてみると、いままで先生のそば
にいた女の子のすがたが見えません。先生が第一にさわぎだす、
両親があわててあたりをかけまわる。見ると、そのがけの下の方
へゆつたりとんで行く大きなやまわしのつめにつかまれて、
女の子はばたばたしているではありませんか。

さあたいへんだ。どうしたらいいか。人々はただ、「あれあれ」
とさけぶばかりです。と、そのとき、だれか、その大わしのせ
の上へ、がけの中ほどからどびついたものがあります。だれで
しょうか。その人は、いっしょうけんめいにわしのせにしがみ

ついで、両足で鳥の腹をしめつけるようにしています。だれでしょう。それは、十五六になるひつじかいの少年です。

このひつじかいは、がけの中ほどのあき地に、草のしげっている場所を見つけて、そこへひつじをつれておりて来ています。と、急に目の前へ、大きなわしがひとりの女の子をつかんで舞いおりて来ました。いまそれをとめなければ、もうその女の子は、どこへ持って行かれるかわかりません。そう思うと、勇ましいひつじかいは、身のあぶないこともわすれて、思わず鳥のせにとびついたのでした。一つまちがえば、千ひろの谷間へ、氷と雪の中へ、まっさかさまに落ちこむのでした。

さいわいにその勇ましい少年は、大わしのせにとびつき、その上へ乗りうつって、両足で鳥の腹をしめつけ、上体をびった



りと鳥のせにつけて、右手で鳥のつばさのつけねをつかみ、左手を長くのばして、鳥が大づめてつかんでいる女の子のからだの下へ落ちないように、その上帯をかたくにぎったのでした。そうして、からだの重さで上からぎゅうぎゅうとおしつけ、両足でいっそうはげしく鳥の腹をしめつけました。すると、さすがの大わしも、十五六の少年に上からおされるので、その重さにたえられなくなって、羽ばたきも苦しげに、しだいしだいに下の方へ落ちるように舞い、

おりて行きました。

けれど、もしこのわしが、その舞いおりとちゅうで、高い木の上へでもとまろうものなら、それこそたいへんです。少年はいつ鳥のせからふり落されないものでもない。一こくも早く谷底の地面へおりてしまわなければならない。それに、もしまたとちゅうで、このわしが大きなくちばして女の子の頭でもつつけば、大けがをするか、殺される心配がある。そんなことのないうちに、どこでもいいから、安全な場所へおりなければならぬと、少年は思いました。

ちゅうど、発動機にこしゅうのできた飛行機乗りが、安全な着陸地を上からさがしているような氣持で、少年は、ときどき大きな声をだして人々を呼んだり、とくに下の方にいる女の子

を元氣づけるために「だいじょうぶだ、安心しておいで、私がいますくつてあげるから」といわずにはいられませんでした。

ところが、下につかまれている女の子は、あきらめたのか、おそろしいのか、それともおどろいて氣でも失ったのか、すこしもさわがず、あばれもせず、じっとしています。もう呼吸もなくなったのかと、そのことがまた、少年の氣にかかってきました。

とにかく、朝の冷たい空氣の中を、アルプスの深い谷の中を、大わしは、少年をせにのせ、少女を下にさげて、ずんずん、落ちるように、下へ下へとおりて行きました。もう、がけの上で「あれあれ」といつている人々の目には、小さな小さな黒い点かなにかのようにしか見えなくなっていました。

そのとき、鳥はサアツという羽音をさせたかと思うと、もうたまらなくなつたのか、その重荷をふり落すように、ある岩角のすこしあき地のあるところを目がけておりて行きました。すると少年は、あぶないことが近づいたと感じたので、左手は女の子の上帯にかけたままで、右手をはなして、手早く、自分のこしにさしていた短刀をぬいて、鳥がそのあき地へ身をおろすかおろさないうちに、鳥のせ骨をさけて一つきつき通し、鳥を後へひっくり返すようにする。いき



おいて、ぱつと、地面へすばやくとびおりました。すると、鳥は、不意のしゅうげきにおどろいて、思わず羽ばたきするとともに、つかんでいた女の子をはなして、あおむけにたおれかかりました。いま、少年の左手には女の子が、右手には血にそまつた短刀があります。

少年は、必死のかゝごで、すばやく女の子を自分のせなかにかくしました。

大わしはすぐにとび起きて、きずのいたみもかまわず、おそろしいいきおいで少年にとびかかって來ました。両方とも必死の戦いです。少年は、右手に短刀をふりかざし、左手で女の子をかばい、昔の物語に出てくる英ゆうのように、このただけしい相手を待ちかまえていました。

大わしは、太いけずめの最初の一げきで少年の頭をくだこうと、向かって来ました。けれども、ひらりと身をかわした少年は、身をかわすと同時に、右手の短刀で鳥のつばさに一たちあびせました。わしの白い下羽が、綿のように一面にちりました。わしは、羽音はげしくすこし舞いたったかと思うと、こんどは両羽をあおりたて、大きな風をまき起すようにして、少年の周囲をおおい包むいきおいでせまって来ました。その目、そのくちばし、その羽音、まったく大きなあくまです。

少年が女の子を後にかばうようにして、すこしあとずさって、岩角へ身をよせかけたとき、ちょうどそこに、手ごろなぐつた岩のかけらが目にはいりました。少年は、すばやく短刀を持ちかえた右手で、その石を取るが早い、目の前二メートルほどまでせまって来たこのあくまの胸をめがけて、全身の力をこめて投げつけました。おらいのはずれようはずはありません。大わしは、この思わぬいたてにおどろいて、ぱっと一まず舞いたちましたが、まだこりないでやって来ました。

それから、必死にとびかかる大わしと、この勇ましい少年との戦いです。少年の投げつける石は、鳥のつばさに、胸に、目に、ひしひしとあたります。そのたびごとに、鳥はさけび声をたてて、苦しきまぎれに、いつそうするどくとびかかります。羽風で空気がゆれ動き、ちよつとでもゆだんをすれば、それにふきとばされ、ちよつとでも氣をゆるめると、鳥のくちばしでつき殺されます。まわりには、鳥の白い羽が雪のようにとびちりました。その中で、女の子を後にかばいながら、少年は苦し

い戦いを続けていました。

そのとき、がけの中ほどから、ガヤガヤという人声が聞えてきました。少女の両親たちが、そのへんにいたひつじかいたちを頼んで、大急ぎでおりて来たのです。ようやく道を見つけて、この鳥と少年との戦っている岩角近くまで来ました。けれども、戦っている人と鳥とはむちゆうです。血まなこになって目の前のてきを相手にしているものには、なんにも耳にはいりません。ふいに「ドン」という鉄ぼうの音がしたかと思うと、いままでむちゆうになつて少年目がけてとびかかっていた大わしは、空をころぶように、くるくる舞いをして、下の方へ、谷の中へ落ちて行きました。少年はほっとして、思わず後へたおれかかりましたが、気がつくともう自分のまわりには、おおぜいのひ

つじかいが集まって来ており、父親のうでにだかれた女の子は、にこにこわらつて、この自分のすくい主へ手をさしだしていました。

そのときの少年の喜び、そのときの女の子の両親の喜び、おおぜいの人たちのほめことば、それはいまここでいうまでもありません。目の前の美しい、大きなユングフラウのまっ白な山までも、朝日の中のこの勇ましい少年をほめたたえているようでした。



三 文字の話

文字のはじめ



私たちは、自分の考えを表わすのに、ことばや、身ぶりや、手まねなどを用いる。けれども、それをその場にはない人や、遠くにいる人に知らせるためには、文字に書くか、またほかに特別の表わしかたをしなければならぬ。これは、記おくのためにも必要な方法である。

それで大昔には、なわを結んで、その結びかたや、なわの色や、なわの太さなどによって、いろいろな考えを表わした。ま

た、木の皮や、あさなわなどであんだひもつかい、色のちがった貝や、じゅずだまを結びつけることも行われた。それから、ぼうきれや、石や、貝がらなどに、はものなどでしるしをつけ、てしめすことも行われた。

これらの表わしかたとともに、事物の形を絵にうつすことも行われた。

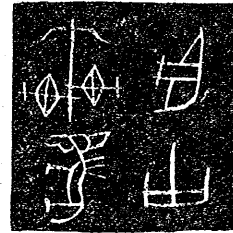
この絵のだんだんりやくされてきたものが、文字というものの起りとなった。

いまから五六千年ぐらいまえに、アフリカのエジプトには、そうした絵文字とよばれるものがあつた。中部アラビアあたりにも、これに似た文字があつた。

漢字も、もとは事物の形を表わした絵文字から起り、これが

だんだん変わって、しだいに形のきまったものとなり、今日のようになつたといわれている。

漢 字



漢字は、いまいったように、はじめ、事物の形をうつしたもので発達したものであるが、形のないものは、この方法では表わすことができない。

そこでたとえば、数という形のないものを表わすのに、線を横に一本引いたり、二本引いたりした。また、「うえ」「した」という考えを表わすするには、線を横に引いて、「上」をその線のうえにおいたり、したにおいたりして表わした。「上」「下」とかいう字の

起りである。

木は、もともと形をうつしてできたものであるが、それに線を加えて、「も」とか、「す」とかいう考えを表わすことにした。いまの「本」「末」とかいう字はそれである。

また、それまでに作られた文字を組みあわせて表わすこともくふうされた。たとえば、「日」と「月」をあわせて「明」が作られ、「木」を二つならべて「林」、三つ重ねて「森」が作られた。

「枝・板」など、その文字の左側に「木」を書いて、「えだ・いた」などと、「木」に関係のあることを表わし、字の右側に、「支・反」をおいて、「シ・ハン」という音をしめしたりした。

漢字が中国から日本に伝えられたのは、千七百年ほどまえであるが、日本では、「山」を「サン」、「海」を「カイ」というようにもとの中

國の発音にしたがつた読みかたをしたが、一方、「山」を「やま」、「海」を「うみ」などにつかつて、その漢字の意味にあった日本語をあてて読むこともした。

このように、日本では一つの漢字をふたとおりに読んできたが、中國の発音にもとづいた漢字の読みかたを「音」といい、日本のことばによる読みかたを訓という。

それで、たいていの漢字には、この音と訓のふたとおりの性質のちがつた読みかたがある。しかも、字によつては、いくつかの音のあるものがあり、またいくつかの訓のあるものもある。たとえば、「上・下・生」などの読みかたをちよつと考えてみただけでも、このことがすぐ理解されよう。

かな

義阿止
都久留
伊志乃

日本では、中國から傳わつた漢字をつかつているうちに、その漢字から、日本語を表わすのに便利なかなや、ひらがなを作りだすようになった。

かたかなは漢字の一部分をとつて作つたもので、たとえば、「江」から「エ」、「加」から「カ」などと書くようになった。ひらがなはかなのように漢字の一部分をとつたのではなく、たとえば、「いは」、「はは」、「波」、「には」、「仁」というように、漢字の全体をくずしたもので作りだしたものである。

かなは、日本の文化にとつて、ほんとうに大きな発明で、こ

のかなのおかげで、日本のことばを、たやすくしかも自由にうつすことができるようになった。あの有名な源氏物語や枕草子などは、すべてこのかなによつて書かれた作品である。

しかし、いまでは漢字の長所をいかして、かなに漢字をてきとうにまぜるのが、文章のふつうの書き表わしかたとなっている。

ローマ字



ローマ字は、アメリカ・イギリス・フランス・イタリア・トルコ・インドネシア・フィリピンなど、世界の大半につかわれている文字である。

ローマ字は、まえにいったように、その大もとをたずねれば、エジプト文字から出たものである。このエジプト文字がフェニキアに移ってフェニキア文字となり、さらに、そのフェニキア文字がギリシアに傳わってギリシア文字となり、それから、そのギリシア文字がローマに移って、現在のような形になった。ローマ字といわれるのもそのためである。

ローマ字は、全部で二十六字である。

この二十六字のローマ字を利用して、発音のちがっている多くの國々のことばが書き表わされている。

日本のことばも、ローマ字で書くことができる。

ローマ字をつかうと、字数が少なくてすむばかりでなく、発音のこまかなところまで書き表わすことができ、標準語の教

育に役だつ。また、ローマ字は世界的の文字であるから、日本語が世界の人々に親しまれるようになるであろう。

日本語の書き表わしかた

いま日本では、漢字と、かたかなと、ひらがなの三種類の文字をつかつており、その



うえ、ローマ字の教育にも努力している。しかし、考えてみると、世界のどこに、こんなに三種類も四種類もの文字をつかつている国があるうか。日本のことばをもっとも正しく、もっとも簡単に書き表わす方法がないものであるうか。私たちは、この問題をもっとよく考えてみよう。

四 めぐりあい

赤絵のはち

まぶしい日の光をさけながら、銀座通りをアメリカの一しようこ子が歩いていたが、ふと、ある店先で立ちどまった。ウィンドにかざられてあるさらやはちを、しげしげとのぞきこみながら、

「美しい赤色だな。あの、ニューヨークのメトロポリタン博物館の――」

とつぶやいた。

かれは、かるくドアをおしあけながら、

「あれは今右衛門
焼じゃありませんか。
古い焼物
そっくりですね。
と、じょうずな日
本語で話しかけた。
店の主人はあわて
て、



「たいへん焼物がおすきのようですが、あなたは
と、あいさつともつかず、返事ともつかない答えかたをした。
「いや、これは失礼しました。私はハギンスというものですが、
じつは、私のプリンクリーじいさんがね」

と、いって、すすめられたいすにかけて、楽しそうに語りだした。

話は明治初年のころにきかのぼる。

徳川時代の長いしきたりが、明治になってすっかりようすを
変えてしまったので、それまでのものの考えかたや商賣では、
ふだんの生活さえむずかしくなってきた。そこで、日本の手工
業も、外国から新しい方法を学んで、つきつきと近代的工業の
道をたどっていくようになった。

ハギンスの祖父にあたるプリンクリーが、日本政府から頼ま
れて、鉄ぼうのうちかたを教えるためにやって来たのも、その
ころのことであった。

ある日、プリンクリーは、どうやら覚えた日本語で、町をひ

とりで散歩していた。ひくい屋根も、あけはなした店も、のき先にかかっているおもしろいかんばんも、かれには、みなめずらしいものばかりであつた。ある小さな店先に出ていた一まいの赤絵のはちを手にとって、かれは、びっくりした。いままで見たこともないみごとな焼物であつたからである。

「これは賣りものですか。」

「はい、さようでございます。」

「いくらでしようか。」

そのねだんのあまりに安いのにおどろいた。

「こんなものが、まだほかにもありますか。」

「いいえ、もうこれだけです。」

「どこで作りますか。」

「九州の有田です。ときどき焼いては、この店に持って來ますが、なにぶん作るのにてまのかかるもので。」

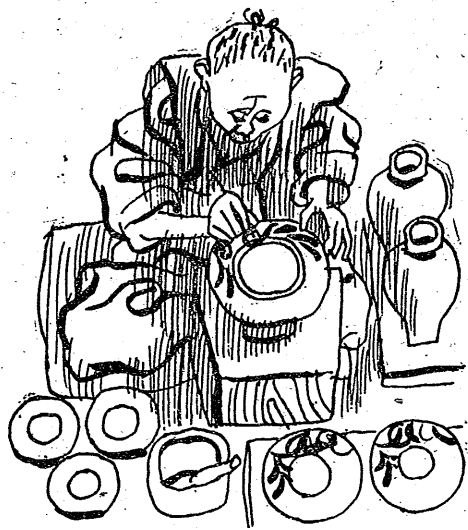
プリンクリーは、まんぞくそうに赤絵のはちをながめながら、その話のさきをうながした。店の主人は、きかれるままに語りだした。

有田に焼物がはじめられたのは、いまから三百三十年ばかりまえのことである。

佐賀はん主は、お庭焼といって、自分の家でつかう食器とか、おくりものにする焼物とかを作らせていたが、そのお庭焼の中でも、「色なべしま」といわれる、色のはいったものが、いちばんすぐれていたという。このお庭焼のために、細工人、画工、ちよ

うごく師、下ばたらきの者などが、三十数人かえられていた。そのほかに、色絵をつける赤絵屋もあったが、これははん主からゆるされた十六人だけが、有田に赤絵町を作って住み、この赤絵製作の方法が他にもれないように、保護されていた。ところが明治になって、はん主の保護がなくなつたうえに、いままで、焼く人と赤絵屋がわかれてしごとをしていたため、ひとりでこの焼物を作ることは、むずかしいことであつた。

今右衛門は、すぐれた赤絵の技術をどうかして残したいと考え、自分でまず、焼くしごとからはじめた。しかし、そのしごととも簡単にできあがるものではなく、白く焼けるはずのものが黒くなったり、黄色くなったりして、失敗に失敗を重ねていった。職人のちんぎんや材料のお金をはらうために、家の道具を賣らなければならなかつた。それでも、やりかけたこのしごと



とがあるということを聞いて、作品を東京や箱根へ賣りだすことにしたのである。

はやめなかつた。やがて、思いどおりのものを作ることのできる日がきた。しかし、このような美術品を買い求めるようなものは、ほとんどいなかつた。ただわずかに外国人がこれに目をとめて買うこ

「そうですか。よくわかりました。せっかくだけついできたこのしごとは、ぜひ続けてください。この焼物をやめれば、日本から美しいものが一つ消えてしまうことになります。それはおいしいことです。品物は私が買いうけましょう。ほかの外國人にも話してあげましょう。どうか、私のことばを今右衛門さんに伝えてください。」

これを耳にした今右衛門は、

「よし、どんなにお金に困っても、どんなに苦しんでも、この赤絵の技術を続けよう。」

と決心し、いよいよこのしごとに熱情をこめた。

そのときから、ブリンクリーは、日本の美しい焼物にひきつけられていろいろな焼物を集めた。また、日本についていろいろの研究を進め、日本の歴史を書いたり、辞書を作ったり、日本人のための英語教科書の編さんまでしたりした。ジャバンタイムスという新聞も発行した。しかしなんといつても、日本の古い美術に対する愛着がふかく、日本美術工芸史十二巻という大作を著わした。また、名高い大英百科辞典の東洋美術についての説明は、ブリンクリーのふでになったものである。

主人は、新しい茶をハギンスにすすめながら、

「すると、あなたは、そのブリンクリーさんのおまごさんでしたか。じつは、私は今右衛門のまごにあたるものです。」

と、自分のことをうちあげた。祖父たちの間に結ばれた心が、なん十年の月日をへだてて、いま、まごたちによってふたたび

結ばれることになった。

・熱情のことば

話は、第一次世界大戦がたけなわであったころのことである。そのころ留学生としてアメリカのスタンフォード大学に学んでいた私は、一年半の努力の結果、しゅびよく書きあげた論文を持って、その出版の用事かたがた、東部諸州へ見学の旅にのぼった。真心こめて教えてくださった世界的魚類学者デビッド・スター・ジョルダン博士は、別れに際して、各地の大学者たちへのていねいなしよかい状をくださったうえ、いろいろではずをしておいたから、ぜひカーネギー博物館に館長ホランド博士をたずねるよすがに、とおっしゃった。

とちゅう、あるいはミシガン湖のほとりにたたずみ、あるいはナイヤガラの水をながめ、ボストン、ニューヨーク、ワシントンと無事に旅を進めて、カーネギー博物館のあるピッツバーグに着いたのは、暑い真夏の日の朝であった。

目ざすりっぱな博物館に自動車を乗りつけ、守衛にみちびかれておくまった館長室の前に立った私は、しばしためらったのも、意を決して大きなドアをコツコツとノックした。

「カム イン」

と答える、ひくい、しかも力強い声に、しずかに室内にはいった私の目に映じたのは、廣いへやの窓ぎわに大きなデスクをすえ、そばにいたイビストになにごとかをいいながらうたせているしらがの老しん士のすがたであった。

学生時代からそんな敬していたあの有名なちようるいずふの著者ダブリュー・ジェー・ホランド博士、いまその大先生にお会いすることができた私は、なんというしあわせ者であろう。

博士は、しずかに歩みよる私が手にしているしよいかい状に目をそそいで、

「そのあい色のふうとうには見おぼえがある。わかった、わかった。きみは、かねがねジョルダン博士からいつてきている日本の学徒、大島きしまくんでしょう。まあ、かけたまえ。」

と、私が一言も発しないうちに先手をうつて、かたわらにあっていすをすすめるのであった。

私がこの博物館をたずねたおもな用事は、世界の学者がだれものぞんでいるカーネギー博物館の刊行物として自分の論文を出版してもらうことで、恩師ジョルダン博士は、そのためのはずを早くからすすめられていた。あいさつを終って、用事をきりだすと、話に聞きいつていたホランド博士は、戦争中で費用が思うようにつかえないことについてくわしく話し、それとなく論文刊行のむずかしいことをにおわせた。そうしてつぎのように語った。

「まあ、そのようなありさまで、せっかくのおたずねもむだになるようなわけだが、それはそれとして、きょうはきみがまだ生まれないころの日本の話をさせてもらおう。私が日本をおとずれたころは、西洋の文化をとり入れることがさかんなときで、鹿鳴館かめい館というクラブがあり、おかしなもよおしをしていたものだ。そのころ日本をたずねた外人の中で、富士山

や磐梯山のいただきをきわめたのは、アメリカ山がく会會員であつた私をはじめてだろう。そのときは、まだ三角測量が行われていなかったのて、富士山の高さも不明であつた。そこで、山のいただきに立つた私は、小手をかざして足の下にひろがる駿河湾の海岸線をながめ、その角度を目算して紙上計算してみたが、その際算出した高さは、実測の結果とわずか十フィートしかちがわなかった。そんなわけで、私と日本とはふかい関係があるのだが、きょうは、はるばるたずねてみえたあなたへのごちそうに、日本留学生第一号とでもいおうか、私をはじめて会つた日本人について話をしてあげよう。そうそう、指おり数えると数十年の昔になるが、私がまだわかつてアムスト大学の助手をつとめていたころ、寄宿舎で二

間続きの室をつかつていた。ところがある日のこと、せんばいの教授がやって来て、きみは室を二つももっているようだが、その一つに日本の青年をとまらせて、そのせわをしてはくれまいかと、やぶからぼうの話をもちだした。ものずきな私は、それはおもしろいと、教授の申し出でをさっそく承知して、はじめて見る東洋の青年をひきとつたが、室は二つあつても、つくえは一つしかなかった。そこで、大きなつくえのまん中にチヨークで線をひき、向こうは日本、こちらはアメリカといつて、たがいに向かいあい、勉学にいそしむことにしたが、その日本の青年はなかなかの人物だったよ。そのころ、もう熱心なクリスチャンになっていたが、ある日のこと、せい書をギリシア語で読みたいといひだした。それはおやす

いご用だ。そのかわり日本語を教えてくれと、その申し出で
を承知して、私はすぐに授業にかかった。つまり、私はかれ
のギリシア語の先生で、かれは私の日本語の先生というわけ
だが、かれこそ、のちに名をなした新島襄だよ。

自分から話したしたホランド博士は、遠い昔を思い出して、
ひとりそのときの思い出にふけていられるようすだった。

新島先生年ぶには、『慶應三年九月二十一日、マサチュセツ
ツ州アマスト大学に入学、北側の第八号室に入る。室友ホラン
ド先生、自然科学にもっともきょうみを有し、化学、生理、植
物、鉱物、地質等をこのんで勉学す。』とある——新島襄とい
う名を耳にした私は、とびあがらんばかりにおどろいた。こうし
てなお語り続けようとする博士をさえぎって、

「新島のおじさんなら、私はよく知っています。私は小さいと
き、その新島襄にたいそうかわいがられたのですから。」

と、ありし昔を語ろうとした。すると博士は、

「いやいや、時代がちがう。きみたちが知っているはずがない。
と、一言のもとにしりぞけようとした。が、ことばみじかにそ
の関係を物語る私の顔を、あなのあくほど見つめていた博士は、
つと立ちあがって、

「おや、これはまた意外だ。じつにめずらしい日本人が舞いこ
んで来たものだ。それなら襄の写真やら、当時の日記やら、
きみに見せなければならぬものがたくさんある。きょうは、
もうこれでしごとはやめた。さあ、うちへ行こう。」

と、あっけにとられているタイピストをしり目に、げんかん

出て、横づけにしてあつたりっぱな自動車に、ためらう私をおしこみ、一路自たくへと車を走らせた。

同志社をわが子のように、だいに胸にだいてはぐくみ育てていた新島のおじさんが、やまいを札幌のこう外に養っていたのは、明治二十年の夏であつた。当時、母校札幌農学校の教師をしながら、恩師クラーク博士の精神のやどっている札幌独立教会をつかさどっていた私の父とは、心をゆるした間がらのこととて、両者のつきあいはかなりひんばんであつた。ふつう「満ぼう」でとおっていた私は、そのときちょうど四つのいたずらざかりであつた。ことに、長男に生まれて父母の愛を一身に集めていた身にとつては、天下におそるべきなものもなく、わ

がままいっぱいにふるまっていた。

新島のおじさんとおばさんは、「満ぼう、満ぼう。」といつて私をかわいがつた。京都に帰ってから父に送った手紙のどれにも、「ちかごろ、満ぼう先生はいかが、毎日お話いたしております。」と、必ず書きそえてあつたのを見ても、その愛されかたがわかる。そのころ、新島のおじさんがどんなにえらいかたであるかを知らなかつた私は、札幌の創成川の岸にあつた家につれられて行つても、思うぞんぶんにふるまつた。

ある日のこと、おじさんとおばさんが外出の用意をどとのえ

「満ぼう、いいところへつれて行ってあげるから、さあ、出かけよう。」

と、私をうながした。いそいそとげんかんへ出かけて、ふみ石の上にそろえてある大小二つのくつをちらと見た私は、たちまちふくれあがつてだだをこねだした。

「おじさんたちと行くのがいやなのか。なに、そうじゃない。ではどうしたのだ。なにが氣にさわったのかなあ。やえ子、満ぼうがまた、おくの手をだしたよ、よわったなあ。」
といらて、おじさんはおばさんに助け船を求められた。

「満ぼう、なにが氣にさわったの、おばさんにいってごらん。小さな声でうったえる私のくりごとを耳にしたおばさんは、腹をかかえてわらいだした。

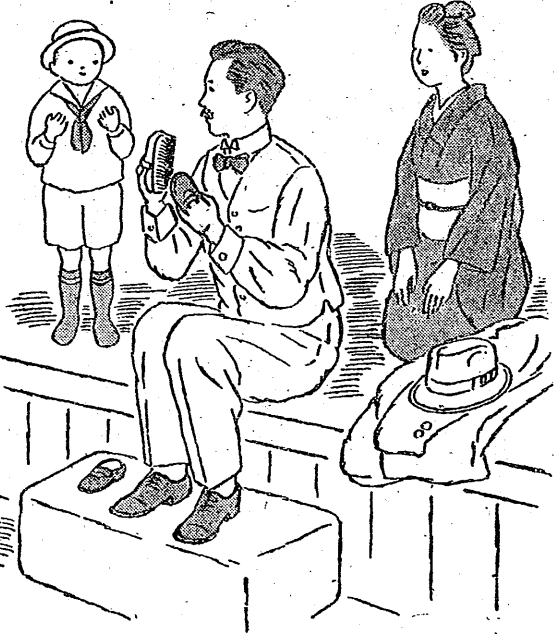
「おじさんのくつは光っているのに、ぼうやのくつはほこりだらけだから、行くのはいやだといっているのですよ。なんと

かしなければ、おみこしはあがりませんよ。」

「ああそうか。よしよし。」

おじさんは、きちんと着ていた上着をかなぐりすてて、かた手に小さなくつを持ち、かた手に大きなブラシをつかんで、力のかきりみがきをかけた。

「満ぼう、これでどうだ。おじさんのようにきれいになったろう。さあ、行こうぜ。」



だされたくつを見て、にこにこどわらった私は、それを足先につっかけるなり、すぐ、小鳥のようにとびだした。

「かわいいぼうやだな。」

おじさんとおばさんはそのあとを追って出て来られたが、門を出て十メートルとは行かないうちに、私は、道のまん中で、無言でつつ立ったまま動かなくなった。

「よわったなあ。やえ子、ぼくのステッキを持っておくれ。」

おじさんは道ばたにしゃがんで、自分のせをたたきながら、

「満ぼう、これか。」

と、にこやかにわらいながら私によびかけた。見るなり私は、おじさんの廣いせなかにとびついた。そうして、足をばたばたさせながら、

「おじさん、早く歩いてよ。」

と命令した。

暑さのきびしい夏の日に、私をせにおいながら、あせをふきふき歩かれた新島のおじさんと、日がさをさしかけながらついていらっしやった新島のおばさんの思い出は、いまでも私の胸にやきついている。

秋たけてりんごのみのるころ、おじさんとおばさんは京都へひきあげられたが、その道すがら、小樽で目についたといつて、車のついたみごとなおもちゃを私に送ってくださった。喜んだ私は、朝早くからそれをガラガラとひきまわすので、家の人のねむりをさまたげてしかたがない。そこで、たまりかねた家の書生が、これから車のついたものは送ってくださるなど、くじよ

うの手紙を京都へ送ったりした。その次には、りっぱなむしや人形にそえて、ご兩人の名まえ入りの大きな写真を二まい、満ぼうへと名ざして送ってくださった。

それからいく年たっても、せつくがくるごとにその人形をかざって、ありし日をしのぶことをわすれなかった満ぼうの心から、どうして新島のおじさんのすがたが消えうせよう。

なくなった新島のおじさんがいい残された願いによって、私の父は、同志社を守り育てるために、北海の地をすてて、京都にすまいを移すことになった。十の春をむかえた私は、母や多くの弟妹たちをあとに残し、ひとり父につれられて、景色の美しい京都に移った。そのころは、新島のおばさんは廣島におら

れて、学校のいきかえりにその門前を通っても、新島家の窓は、かたくとざされてあった。そのうちにクリスマスの日がめぐってきた。新島家のどなりにあった教会の日曜学校の生徒であった私は、そのクリスマスに得意の銀てきをふいたが、私がだんをおりるのを待ちかまえていた老婦人が、

「おお、満ぼう。」

とさけんで、しっかと私をだきしめた。ああ、なつかしい新島のおばさんだった。そのなつかしい顔をあおいだ私の目からは、たまのようなみだが流れ出た。

そのことのあったあくる日、私は、ひさしぶりで窓のあけはなたれた新島家をおとずれた。おどる胸をおさえながらたどりついたげんかんには、おもむきのあるかねがつるしてあって、

これでたけというように、しゅもくがそえてあった。

「新島のおばさん」

とよんだつもりで、私はかねをカーンとたたいた。音もなくドアがあいて、半身をだした老婦人が、

「満ぼうが来た。みんな早く出ておいで、満ぼうが来たよ。」と、家の人によびかけながら、おもわずどびこんだ私をだきしめた。

なつかしい新島のおばさん、おばさんは目になみだをためながら、しゃにむに私をおく深くひき入れた。そうして、

「おじさんが生きていたら、どんなにか喜ぶだろうに——」
といいながら、主なき書さいへ私をみちびいた。

「ここがおじさんのおへやですよ。あれをござん。」

と指さされるままに、顔をあげてへき面を見あげると、おじさんの大きな写真があった。きずのあるみけんの下にかがやく目は、思いなしかやわらいて見え、その口もとがほころんで声さわやかに「満ぼう」とよびかけそうであった。

「つくえの上をござん。」

おばさんのことばに目をうつすと、おじさんが日夜ふでをとっていられたという大きなつくえの上に、いつをみがかせた満ぼう時代の私の写真がかざられてあるではないか。

ああ、新島のおじさんは、私を京都までもつれて来て、朝夕かわいがってくださったのだ。手紙のたびごとに、どうしているかとたずねられたのもそのはずだ。いまその写真の主が、こうしておじさんを見あげているのに、おじさんの声は聞えない

のだ。暗い心になって、じっとおじさんの写真に見入りながら、私は無言で頭をびよこんどさげた。

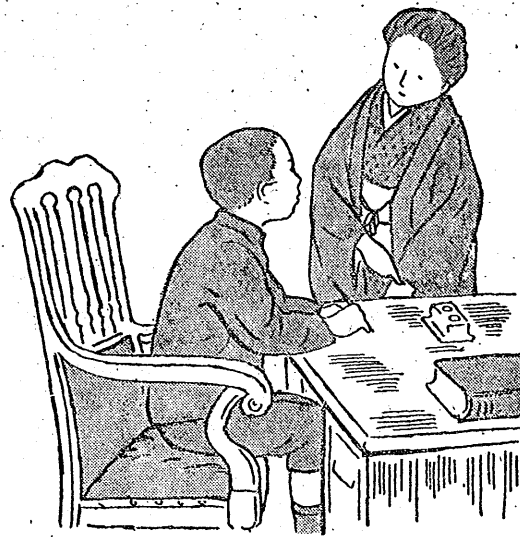
せきあえぬなみだに目をくもらせたおばさんが、

「そのいすにこしかけてごらん。」

とおっしゃった。

「そこに赤インキがおいてあるでしょう。おじさん

は、年とられてから目がわるくなつてね、手紙でもなんでも赤インキで書かなくては見えないようになつたので



すよ。そのペンをにぎつてごらん。おじさんのつかいなれたペンですよ。ああ、満ぼうがいすにこしをかけて、ペンをにぎっている。このすがたをおじさんがごらんになつたら、

「いって、おばさんは声をくもらせた。それから、

「いっしょにお寺へ行つて来ましょう。そうしておじさんを喜ばせましょうね。」

とおっしゃった。

人力車に乗ったおばさんは、昔のように私をひざにのせた。

町の東にある寺の一角に、こけむす一つのおはか、その前に立つたおばさんは、

「満ぼうがまいりましたよ。」

「いって、私をひきよせた。」

勝海舟の筆になる「新島襄之墓」という五つの文字をきざんだ
そのおくつき。はか石に水をそそぎながら、

「満ぼうですよ。」

と、おばさんはふたたび呼びかけた。

私は、

「おじさん。」

と呼びかけようとしたが、声が出なかった。しずかに頭をさげ
た。

ピッツバーグの町を走り出た自動車は、やがてこの外のすば
らしい家のげんかんに横づけになった。ドアをおして、つかっ
かと中にすすんだホランド博士は、客間に私をみちびき、自分

は書さいにはいつて、しきりにさがしものをしておられたが、
やがてすがたをあらわした博士の手には、古ぼけたアマスト時
代のもの、京都時代のもの、なつかしい数々の写真があった。
ふかい思い出にうたれてゐる私の目の前で、博士は、

「それ、このとおりだ。」

といって、日記をくりひろげ、つくえに白線をひいて「國境」をつ
くったあたりを、声高らかに読みあげられた。

ちようどそのころは眞夏であつたので、博士の家族たちは暑
さをどこかにさけて、家の中はがらんとしていた。やがてお晝
どきになったので、廣い食堂にみちびかれ、博士とたつたふた
り、しずかに食事をしたが、平和主義の旗がしらとしてその名
を知られてゐた老博士は、きょうに乗じて、アメリカの考えか

たについて熱意をこめて語られた。

——親の目から見れば、自分の子女は、その性質がどんなにちがっていても、かわいいことはみな同じであつて、そこになんのけじめもない。兄と弟とのちがいは、いでん学上の能力のちがいは別として、一方が先に生まれ、他方があとから生まれたというだけのことと、それによつて兄が特権を與えられねばならないという理由はすこしもない。親としてみれば、自分の子女にはすべて同じ教育をほどこし、同じ機会を與えて、社会に巣立たせたいのが念願である。神の目から見れば世界の人類はすべてその愛する子どもなのだから、人種的な区別などあるべきはずはない。四海の民すべて兄弟姉妹である。それで、世界平和、人間平等という理念が、ここからわいてくるのだ——

——と、テーブルをたたいて立ちあがつた老博士は、フィッシュナイフをにぎつた右手を大きくふりまわし、

「愛はにくしみよりも強い。」

と、力をこめてさげびながら、そのにぎりこぶしを私の鼻先に突きだされた。——ああ、忘れもしない、満面べにをさして語られたホランド博士のあの熱情のことば。

日本へ帰つたら、新島夫人にきょうのゆかいな会見のてんまつを傳えてくれといいながら、自動車のドアに手をかけた老博士が、さらに、

「先ほどの話は、こころよくひきうけたよ。」

とささやかれた。博士は、そのことばの意味をときかねていた私のようなすを見て、大きな声でわらわれ、こんどははっきりと、

「きみの論文を、カーネギーで出版することは、ひきうけたよ。」
といたされた。

「ああ、新島のおじさんが、いまなお満ぼうを守っていてく
ださったのだ。」

私は、停車場まで送ってくださった博士のこう意をふかく謝
して、別れの手をさしのべると、博士は満面ににこやかなわら
いをたたえながら、

「ドウイタシマシテ。」

と、意外なあいさつをされた。そうして、これが新島からならつ
た日本語の一つだといわれた。

五 その人のことば



生きるためにたべよ。たべるために生きるな。

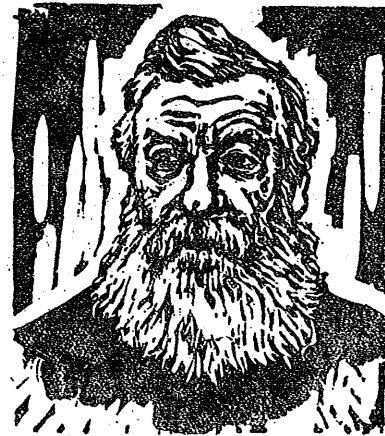
きょうのできごとを、あすまで
のばすな

神は、みずから助くる者を助く

— フランクリン —



きみたちの考えが、たとい世間の考えとちがっていても、その発表をためらってはならない。
はじめ、きみたちは、世間の人にわかってもらえないかもしれない。けれども、きみたちは、ほどこなく、みかたができるだろう。ひとりの人間にとって真実であるものは、他人にとっても真実だからである。



人の心をひくために、しかめつつらをしたり、みょうな身ぶりをしてはならない。

すなおなれ。

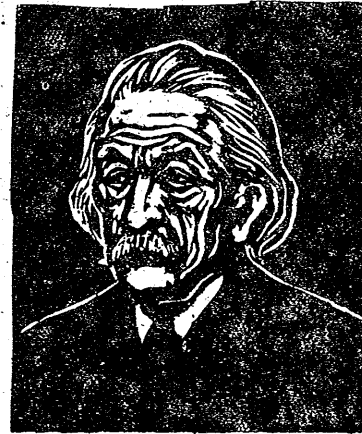
— ロゲン —



私には、あなたがた日本の小学校のみなさんに、このあいさつを送るだけの特別の権利があると信じます。といいますのは、私は、あの美しいあなたがたのお國を親しくおたずねして、町や、家や、森や、山をながめたり、また、そうした風景から、自分の國を愛するということを学んでいる日本の子どもさんたちにも、お目にかかったことがあるからです。

私のつくごの上には、日本のみなさんが書いたあつい絵の本が、いつもおかれてあります。

歴史の上で、いろいろな國の人々の間に、友だちとして心のかよったおつきあいができるようになったのは、われわれが最



初であります。それ以前は、おたがい他國のことはわからず、世をすごしてきたばかりでなく、實際は、たがいにくみあったり、おそれあつたりしてきました。友愛の精神が、もつともつとひろがつていきますように。そう思

——アインシュタイン——

天は、人のうえに人をつくらず、人のしたに人をつくらず。

——福沢諭吉——

いだいなれよ。

平ぼんなれよ。

平ぼんにしていだいなれよ。

空氣または日光のごとく

平ぼんなれよ。

——内村鑑三——

六 幸福の園

雲のまぐあがると、園の前方に、高い大理石のまるい柱でできた大廣間のようなものがあらわれます。テーブルのまわりには、この地球の上でいちばんふとっている「幸福(せいたく)」たちが、けだものの肉や、ふしぎなくだものを、水がめや、ひつくりがえったかなえなどの間で、たべたり、飲んだり、「キャツキャツ」とさわいだり、歌を歌ったり、ぶつかったり、よろけたり、ねむりこけたりしています。みんなびつくりするほど、とてもほんどうと思えないほど、ふとつていて、びろうどや、にしきにくるまり、金だの、真珠だの、寶石だのを、頭にいっぱいつけています。

チルチルとミチルと、いぬと、パンと、さどうとは、はじめはいつて来たとき、すこしはにかんで、みんな右手の前方に、光をとりまいてかたまっています。す。ねこは、ひとことも口をきかず、これも、右手の方のおくへ向かつて歩いて

行つて、黒いまくをあげて、すがたをかくしてしまいます。

チルチル「あんなにうまいものをたくさんたべて、うれしそうにしているふとった人たちは、だれだろう。」

光

「あれがこの世の中でいちばんふとつただれの目にも見える『幸福』どもだよ。どうもあんまりあてにはならなけれど、青い鳥だって、ことによるとちよいとでも、この人たちのなかまにまよいこんでいないともかぎらない。だからまだ、ダイヤモンドを、まわしてはいけな

いよ。ほんの形だけでも、廣間の方をさがしてみよう。」

チルチル「私たち、あそこへ行つてもいいの。」

光

「いいとも。あの人たちは下等でもあり、たいていはまあ、育ちのわるいものばかりだけれど、人はわるくな

いんだよ。

ミチル 「なんてきれいなおかし
でしよう。」

いぬ 「それに、あんなに肉が
ある。ちようづめもあ
る。小ひつじの足に、小

パン 「いかにもうまさうだな
あ。うまさうだなあ。

私よりよっぽど大きい。」

さとう 「だが、おまえさんたち
は、あのさとうがしを



わすれたのじゃないかな。あのとおりテーブルの光栄
になっているさとうがしを。いってみれば、すばらし
く美しくて、この廣間のなにもものをおさえている。
いや、どこのなにもものをおさえている。あのさとう
がしをわすれたのじゃないかね。

チルチル 「あの人たち、ずいぶんうれしそうな、幸福そうな顔を
しているなあ。あれ、『キャツキャツ』と喋っている。わ
らいこけている。歌を歌っている。なんだか、あの人
たち、こつちを見たようだ。」

どうどう 「いちばんふとった幸福」が、テーブルをはなれて、大きなおなかを両手
にかかえて、たいぎそくに、子どもたちの方へやって来ました。

光 「こわいことはないよ。あいそのいい人たちだからね。」

きつと、おまえさんたちを、ごちそうによぼうというのだろう。それを受けてはいけない。なにも受けてはいけないよ。でないと、かんじんな用むきをわすれてしまうからね。

チルチル 「どうして、小さなおかしもいけないの。」

光

「みんな、あぶないよ。おまえの氣持をくじいてしまふよ。人というものは、自分のしなければならないうつめのためには、なにかしらぎせいにする心がなければならぬものだよ。ていねいに、しかしきつぱりと、ことわりなさい。」

「いちばんふとった幸福」チルチルの方へ手をさしたしながら、

ふとった
幸福 「チルチルさん、ごきげんよう。」

チルチル びっくりして、「え、あなた、ぼくを知っているの。あなた、どなたです。」

ふとった
幸福

「わたしは、幸福なかまでいちばんふとった『お金持の幸福』です。失礼ですが、この中のおもなものをごしうかいいたしましょう。これが、わたしのむこの『地所持の幸福』で、なしのようなおなかをしています。これが『みたされたきよえいの幸福』で、このとおり、りっぱなふくれあがった顔をしています。『みたされたきよえいの幸福』ゆつくりどうぞ。」このなかまは、のどのかわいていないとき、物を飲む幸福と、『腹のへらないときに物をたべる幸福』で、ふたりはふたごで、ふたりとも、足はうどんこです。ふたり、よろよろしながらおじぎをする。これは『なんに

も知らないという幸福で、みんな魚のようにつんぼだし、『なんにもわからないという幸福』は、こうもりのように目が見えない。このかたがたは、『なんにもしないという幸福』と、『必要以上にねむるという幸福』でね、ふたりとも手はパンのしんだし、目はもののジャムです。さて、いちばんおしまい、ここにいるのは、『はちきれそうならい』で、口は耳までさけているし、だれもそれに立ち向かうものはないのですよ。

『はちきれそうならい』が、腹をかえながらおじきをする。チルチル、すこし横の方に立っているひとりの幸福を指さして、

チルチル「それから、あの、なかまにはいらなくて、せなかをむけているのはだれです。」

ふとった
幸福

「あの男のことは、きかないほうがよろしい。あれはすこしひねくれ者で、子どもさんたちにしようかいするのはむずかしい。チルチルの手をにぎりながら、まあ、おいでなさい。みんなえん会のやりなおしをするところです。これでけさから十二どめです。わたしたちは、ただもう、おまえさんがたを待っていたのです。あのどおり、さわぎやどもが、おまえさんがたを呼びたてているでしょう。わたしは、とてもいちいしようかいしてはいられない。なにしろ、おびただしい数ですからね。ふたりの子どもに手をだしながらさあ、どうぞ。おふたりのために、ちゃんと席がとってありますよ。」

チルチル「いいえ、どうもありがとう、ふとった幸福さん。ぼく

は、ほんとうにすみませんが、ちよつとのまも行かれ
ないのです。ぼくたちは、たいへん急いでいるのです。
青い鳥をさがしているのです。たぶん、あなたがたも、
あの鳥、どこにかくれているか、ごぞんじないでし
うね。

ふとつた
幸 福

「青い鳥とね。はてな、そうそう、思い出した。だれだ
か、いつかそんな話をしていたっけ。なんでも、たべ
てはうまい鳥だそうじゃないですか。とにかく、
そいつは、一どもわたしたちのテーブルにのぼったこ
とはないようです。というのは、その鳥をあまり上等
とは思わないからです。だが、まあいいでしょう。もつ
といいものがありますよ。わたしたちの生活のなかま

にはいつて、わたしたちのすること、みんな見ると
いいのですよ。」

チルチル

「なにをするのです。」

ふとつた
幸 福

「それは、いつもしごとをしないことです。わたしたち
は、すこしの休みもなく、飲む、たべる、ねむる、い
やはや目がまわるようだ。」

チルチル

「それがおもしろいの。」

ふとつた
幸 福

「おもしろくないはずはないでしょう。それがこの世の
すべてですもの。」

光

「あなたはそう思うの。」

ふとつた
幸 福

「光を指さしながら、チルチルに向かって、「あの、育ちのわるいわ
かい女はだれだね。」

こんな話をしている間に、「ふとった幸福」どもは、せつせと、いぬと、さとうと、パンをどきつけて、えん会の中にひきずりこんでしまいました。チルチルがふと見ると、かれらはみんなとなかよくテーブルについて、飲んだり、たべたり、はねまわったりしていました。

チルチル「おや、光さん、ごらんよ。みんなは、テーブルにすわりこんでるよ。」

光「呼び返しなさい。でないと、いまに困ることになるから。」

チルチル「チロ！、こら、チロ！、来いというのに聞えないのかい。それからさとうも、パンも、だれが行けといった。そこでなにをしているんだ。」

パン、口にいっぱい物を入れながら、「きょうぎのいいことばをつかってもらいたいものですね。」

チルチル「なんだって。なまいきなことをいうな。なにかおまえについているな。それから、チロ！、おまえもすぐ来い。」
いぬ「ぶつぶついながら、テーブルのすみで、物をたべているときは、だれにもかまっていられませんか。なにも聞えませんかよ。」
さとう「おじょうずらしく、ごめんくださいまし。せつかくおまえをいただきますながら、そうあたふたとおいとますることもできませんからね。」

ふとった幸福「ほら見たまえ。さあ、きみを待っているのだ。おことわりはできませんよ。さあ、みんなで、カズくで、いやでも幸福にしてしまおうじゃないか。」

ふとった幸福どもは、喜びの声をあげながら、いやがる子どもたちをひきずって

行こうとする。その間に、「ばちきれそうなわらいは、光のこしのあたりを、カマかせにおさえました。」

光 「ダイヤモンドをまわしなさい。いまだよ。」

チルチルは「光のいうように、ダイヤモンドをまわします。舞台は清らかな、こ
うごうしい、ばら色の美しい光に照らされます。」

チルチル 「ふとった幸福もがにげて行くのを見ながら、「おやおや、なんてみ

つともないざまだろう。みんなどこへ行くの。」

光 「みんな不幸のところへにげこんでしまうのさ。」

チルチル そらを見まわして、「やあ、なんてきれいなところだろう。」

どこへ来たのかしら。」

光 「同じところにいるのだよ。ちがったように思うのは目のせいです。私たちはやっと、物の眞実を見ることが

できるのだよ。ダイヤモンドの光にたえられる幸福の
精を見るのだよ。」

「ばらの目ざめとか、「水のほ
おえみとか、「あけぼののむ
らさき」とか、「こはくのつゆ」
などがあらわれます。」

光 「かわいらしい幸

福たちがやって

来た。私たちをあんなに來た。」

チルチル 「あの子たちを知っているの。」

光 「みんな知っているよ。」

チルチル 「なんてたくさんいるのだろう。」



光 「もっともっと、たくさんいたものだよ。それを、ふとつ

た幸福」でもが、ひどい目にあわせたのだよ。」

チルチル 「でもいいや。あれだけ残っていればいいや。」

光 「この世の中には、人が思うよりもっとたくさん、幸福はあるのだから。けれども、ふつうの人間には、それが見つけられないのだよ。」

チルチル 「小さな子がやって来た。かけて行って会おうよ。」

光 「むだなことだよ。私たちに用のあるものは、どうせこちを通るのだから。ほかの者にまで会っているひまはないよ。」

小さな幸福のむれ、ふざけたり、わらいこけたりしながら、みどりの園のおくからかけだして来て、子どもたちのまわりで、わになつておどります。

チルチル 「まあ、なんてかわいらしいのだ。どこから出て来たの

だろう。だれなのだろう。」

光 「あれは、子どもの幸福」だよ。」

チルチル 「話をしてもいいの。」

光 「まだだよ。あれは、歌を歌ったり、おどりをおどったり、わらったりするけれど、まだ、お話はできないのだよ。」

チルチル はねまわりながら、「ごきげんはいかが、ごきげんはいかが。まあ、あのふとつた子のわらうことはどうです。なんてかわいらしいほつたをしてるのだろう。なんてかわいらしい服を着ているのだろう。このへんでは、みんなお金持なの。」

光 「なんの、ここだって、どこだって、やはり、お金持よ

りびんぼう人のほうが、ずっと多いのだよ。

チルチル 「どこにびんぼう人がいるの。」

光 「それを見わかることはできないよ。子どもの幸福というものは、地の上でも、天の上でも、いちばん美しいものに見えるものだからね。」

チルチル がまんができなくなつて、「ぼく、あの子たちとおどりたいな

あ。」

光 「それは、どうしてもいけませんよ。もう時間がないのだからね。あの子たちが青い鳥を持っていけないことはわかつているのだからねえ。それにあの子たちは、大急ぎに急いでいる。ごらん、もう行つてしまった。やはり時間がおしいのだよ。なにしろ、子どもの時代は、

ごく短いのだからね。

また、もう一つの「幸福」のむね、まゑよりはすこしせの高いのが、廣間の中にかげこんで来て、ありつたけの声をはりあげて、「みんないる、みんないる、こつち見た、こつち見た」と歌い、子どもたちをとりまいて、陽氣なおどりをします。

幸福 「こんにちは、チルチル。」

チルチル 「また、ぼくを知っている子がいる。(光に)ぼくは、どこへ行つても、だんだん人に知られてくるね。(幸福に向かい)きみはだれなの。」

幸福 「きみ、ぼくを知らないの。ここにいる子をだれも知らないなんて、そんなことあるものですか。」

チルチル すこし困つて、「だつて、ほんとうに、ぼく知らない。会つたおぼえがないもの。」

幸福 「おい、みんな、聞いたろう。この人、まだぼくたちに会ったことがないんだってさ。『ほかの幸福ども、どこ

とわらいくずれる』だって、チルチルさん。あなたの知っているのは、ぼくたちだけです。ぼくたちは、いつだって、あなたのまわりにいるのですよ。ぼくたちは、

あなたといっしょに、たべたり、飲んだり、目をさましたり、息をしたりして、くらしているのですもの。」「チルチル 「おや、そうなの。ぼく、わかった。思い出したよ。でも、

きみたちの名まえを聞かせてくれたまえ。」「幸福 「あなたは、やっぱり、なんにも知らないのですね。ぼくは、あなたのおうちの幸福のかしらすですよ。それから、これはみんな、『おうちにいる幸福どもですよ。』チルチル 「ぼくのうちにも幸福がいるの。」「

幸福 「幸福たちは、みなどつとわらいます。

幸福 「みんな聞いたかい。この人のうちに『幸福』がいるかってさ。戸や窓のやぶれるほど、いっぱい『幸福』でつまっているじゃないの。ぼくたちは、わらったり、歌を歌っ



たり、かべをたたき落し、屋根をもちあげるほどの喜びをこしらえているのですよ。でも、ぼくたちがなにをしていても、あなたには、なんにも見えないし、なんにも聞えないんだなあ。

まず第一に、ぼく自身をしようかします。ぼくは、あなたにつかえる「健康の幸福」です。ぼくは、きれいではないが、いちばんたいせつなものです。こんどあつたら、わかるでしょう。これは、「清い空気の幸福」で、ほとんどすきとおっています。これは、「両親を愛する幸福」で、ねずみ色の着物を着て、いつでもすこし悲しうにしているのは、だれもふり向いてくれないからです。これは、「青空の幸福」で、もちろん青い色の着物を

着ていますし、これは、「森の幸福」で、みどりの着物を着ています。外へ出ればいつでも、この「幸福」たちは見られます。また、これは、「ひなたの幸福」で、ダイヤモンド色の着物を着ていますし、これは、「春の幸福」で、きらきら光る青いたまの色をしています。

チルチル

幸福

「そうして、みんな、いつでもあんなにきれいなもの。ええ、ええ、そうですとも。それから、夕がたになる

と、これが「日ぐれの幸福」で、世界じゅうの王さまのすべてよりもりっぱで、おともに「星の出を見ること」の幸福が、むかしの神さまのような、金びかの着物を着てついています。それからお天気が変わると、これが、「雨の幸福」で、真珠をいっぱいつけています。それから、

『冬の日の幸福』は、こごえた手のために、きれいなむら
さき色のマントを開きます。それから、ぼくは、まだ
なかまのうちでいっとういいのをしようかいしません
でした。まもなくやって来る明かるい『大きな喜び』の兄
弟ぶんのようなものですからね。その名はすなわち、
『むじや氣な考えの幸福』です。それは、ぼくたちのなか
までいっとう快活なのです。それから、これは、いや、
まったくおおぜいすぎますね。もうよししましょう。な
によりも、まず『大きな喜び』を呼びにやりましょう。

ど、見るまに、黒の肉じゅばんを着たわんぱくこぞうのようなのが、聞きとれな
いさけび声をたてて、なにかにぶつかりながら、チルチルに近づいて來ます。鼻
を指ではじいたり、ひら手てたたいたり、いそがしく足でけったりして氣ちがい

のようにはねまわります。

チルチル　びっくりしてひどくおこって、「このらんぼうなやつ、いったい
なんだい。」

幸福　「なにさ、あれは、不幸のほらあなからにげて來た」どて
もたまらなくなるゆかいですよ。」

せの高い、美しい、天使のようなすがたをした者が、きらきら光る着物を着て、
そろそろとやって來ます。

幸福　「あれは、『大きな喜び』ですよ。」

チルチル　「きみ、あの人たちの名まえ知ってるの。」

幸福　「もちろん。ぼくたちは、よくいっしょに遊ぶのですも
の。まず第一にいわなければならぬのは、『正義であ
ることの大きな喜び』で、不正がしかえしされたときに、

いつもにっこりしています。でもぼくは、まだわかいから、あの人のわらうのを見たことがあります。その後にいるのは、『善人であることの大きな喜び』で、いちばん幸福なのですが、いちばん悲しそうです。あれが『不幸』に行くのをとめることは、なかなかむずかしいのです。なにしろ、『不幸』をなぐさめてやることかすきなのですから。そういうわけで、あれにうつちやられると、ぼくたちは、『不幸』そのもののように、みじめなものになってしまふのです。右の方には、『しごとをしあげる喜び』が、『考えることの喜び』のなりになります。その後に、『もののわかる喜び』が立っていますが、あれは、いつでも、兄弟の『なにももののわからない幸福』を

チルチル

さがしているのです。

幸福

チルチル「だって、ぼく、その兄弟にあったよ。『ふとった幸福』たちといっしょに、不幸のなかまにはいつてしまった。『そりゃあ、ぞうでしよう。あれはわるくなつてしまったのです。わるいなかまとつきあっていたものだから、すっかりくさってしまったのですね。でも、それを妹にいつてはいけません。すると、あの女はさがしに行きたがつて、つまり、ぼくたちのなかまから、いちばん美しいものがいなくなつてしまふわけですからね。』さてここに、『いちばん大きな喜び』の中に、『美しいものを見る喜び』があります。それは、毎日ぼくたちを照らす光に、二つ三つずつ新しい光線を加えていくのです。」

チルチル

「それから、あちらの遠い遠い金色の雲の中に、つま先で立って、やっと見えるくらいのところにいる人、だれなの。」

幸福

「あれは、愛することの大きな喜びですよ。まあ、どうあなたがやってみたって、あれをすっかり見るには、まだ小さすぎますよ。」

チルチル

「それから、あすこに、ずっと後の方に、ペールをかぶったままで、ちっとも出て来ないのは。」

幸福

「あれは、人がまだ知らずにいる『喜び』たちです。」

チルチル

「ほかの人たちはなにをしようとしているの。なぜ横っちょを向いたままているの。」

幸福

「いま来ようとする新しい『喜び』をむかえているのですよ。」

その『喜び』は、たぶんここでいちばん純潔なものでしょう。

幸福

「あなた、あの女の人を知らないのですか。まあ、よくごらんなさい。あなたの二つの目をたましいのどん底におちつけて、よくごらんなさい。あの人、あなたを見ています。そら、手をひろげてこちらへかけてくる。あれが、あなたの『おかあさんの喜び』です。くらべるものもない『母の愛の喜び』です。」

方々から急いでかけよって来た『喜び』たちは、『母の愛の喜び』を手をたたいてむかえます。

母の愛

「チルチルや、それから、ミチルや。まあおまえたち、ここにいたの。思いもかけなかったよ。私、きょう、

ここにいて、それはさびしかったよ。ふたりとも、おかあさんにだかれておくれ。なにが幸福とって、これほどの幸福は、世の中にありませんよ。

チルチル

でも、あなたは、うちのおかあさんににているけれども、ずっときれいだもの。

母の愛

「そりゃあそうともさ。私は、もう年をとることはないのだからね。そのうえ、毎日、新しい力と、わかさと幸福とがますのですよ。おまえがにつこりするたびに、わくなるのですよ——うちにいると、それが見えないが、ここでは、なにもかも見えるのですからね。」

チルチル

「それに、このきれいな着物は、まあ、なんてこしらえたの。きぬなの、銀なの、それとも真珠なの。」

母の愛

「いいえ、これは、おまえたちのほおずりと、おめめと、だっことで織ったのですよ。おまえたちがほおずりをするたびに、私の着物に、月と日の光がさしてきてね。」



チルチル

「おもしろいなあ。ぼく、おかあさんがそんなお金持だ

とは知らなかった。いつもそれをどこにしまっているの。それは、おとうさんがかぎをかけたあの戸だなの中にはいっているの。」

母の愛「いいえ、いいえ。私は、いつだってこの着物を着ているのよ。けれど、人間には見えないのさ。人間というものは、目を閉じていると、なんにも見えないのだからね。母親はだれだって、子どもをかわいがるときにはお金持なのですよ。もう、びんぼうなおかあさんもないければ、きりょうのわるいおかあさんもないし、年をとったおかあさんもないのさ。おかあさんたちの愛は、喜びの中でも、いちばん美しい喜びなんですよ。それに、おかあさんたちが悲しそうな顔をしていると

きでも、ほおずりをしてもらえば、すぐそのなみだは、目の中の星になってしまうのですよ。」

チルチル「ああ、そうだ。ほんとうだ。おかあさんの目の中には星がいっぱいある。ほんとうにおかあさんの目だ。でも、ずっときれいだなあ。それから、これもおかあさんの手だ。小さな指をはめている。おまけに、いつかランプをつけるときやけどをしたあとまであるよ。でも、ずっと色が白いな。その中から光が流れたすうだよ。ここでは、うちにいるときのように、しごとをしないの。」

母の愛「いいえ、それは同じことですよ。まあ、おまえ、見たことがなかったかい。この手でおまえのせわをしてい

るときは、いつだってこんなに白くなって、光がさすのね。

チルチル

「ふしぎだな、おかあさん。声までそっくりだよ。でも、うちにいるときよりか、ずっとお話がうまいな。」

母の愛

「うちにいるとね、あんまり用が多すぎて、ひまがないのだよ。さあ、これで、おまえたち、私に会ったのだから、あしたまた、あの小さな家に帰って、私がぼろぼろの着物を着ていても、わかるだらうね。」

チルチル

「ぼく、うちへ帰りたくないや。おかあさん、ここにゐるなら、ぼくもここにいたいや。」

母の愛

「でも、それは同じことですよ。私も下へ行くのですよ。小さな家に帰るのですよ。おまえたちがこの上まであ

がって来たのは、これから下へ帰ってから、どういうように私を見なければならぬか、それを、はっきりとさとするためだからね。わかったかね。チルチルや、おまえは、いまだけ天國に來てゐると思つてゐるけれど、おまえと私とが、かわいがりあうときは、いつても天國にゐるのですよ。おかあさんに、ふたりはありませんよ。どんな子だって、おかさんはひとりぎりです。それは、いつだって、同じおかあさんで、いつだって、いちばん美しいおかあさんなのだからね。おまえたちは、おかあさんをよく覚えて、だいにすることをおわすれてはなりませんよ。でも、おまえたちは、どうしてここまであがつて來られたの。人間が地上に住

みついてからこのかた、いつもたずねあぐんでいた道が、どうしてわかったの。

チルチル

つつましくさしさがっている光を指さしながら、「あの人がつれて来てくれたの。」

母の愛

「あの人、だれなの。」

チルチル

「光さ。」

母の愛

「私、あの人を見たことがなかったよ。あの方は、おまえたちふたりをかわいがって、たいへんしんせつにしてくれるそうだね。でも、なんで、あんなに顔をかくしているの。あの人、顔を見せることはないの。」

チルチル

「いいえ、あの方は、あんまりはつきり顔を見せると、

「幸福」たちがこわがるだろうって、心配しているのです

よ。

母の愛

「あの人、私たちが、あの人をずいぶん待ちわびていることを、知らないのだろう。(ほかの大きな喜びたちを呼ぶ) みなさん、いらっしゃいよ。みんな早くいらっしゃいよ。」

「光がどうとう来てくれました。」

物のわかる喜び

「あなたは光なんですわね。私たちは、ちっとも知りませんでしたよ。あなた、この私がおわかりですか。私は

正義であることの喜び

「物のわかる喜び」でございます。私たちは、それは幸福ですけれど、自分たち以上のものは、見えないのです。私をごぞんじですか。私は、それは長いこと、あなたを求めていた「正義」であることの喜びでございます。

私たちは、それは幸福なんですけれど、やはり、私た

美しいものを見る喜び

「ちの影以上のものは見えないのです。」

「あなた、私をごぞんじですか。私は、あなたをすいて
いる美しいものを見る喜びでございます。私たちは、
幸福なのですけれど、私たちのゆめ以上のものは、見
られないのです。」

物のわかる喜び

「さあ、そのベールをおとりください。私たちは、強く
て、純潔です。」

光

「いよいよベールをかぶって、みなさん、私は神さまのいい
つけを守っているのです。ときはまだ来ないのです。
でも、いまにきつと来るでしょう。そうしたら、私は、
もうなにもおそれず帰って来ます。さようなら。みん
な起きあがってお別れしましょう。ほどなくあらわれ

るあすの日を待ちながら。」

母の愛

「光をだきながら、あなたは、私の子どもたちに、それはご
しんせつでしたね。」

光

「私は、愛しあう人たちには、いつでもしんせつにいた
します。」

「物のわかる喜び、光の方へ行き、ふたりは長いあいだきあいます。やがてはな
れて顔をあげますと、ふたりの目にはなみだが光っていました。」

チルチル

「びっくりして、どうしてないているの。 (ほかの喜びたちを見な
がら) おや、みんなないているのだな。」

「でも、どうしてみんな、目にいつばいなみだをためて
いるの。」

光

「まあ、だまっておいでよ、いい子だから。」

最後の学級日記

きょうは修業式があった。校長先生のお話を聞いてみると、ずつとまえのことが思い出されてきた。はじめてこの学校の門をくぐったときのこと、はつきりうかんできた。

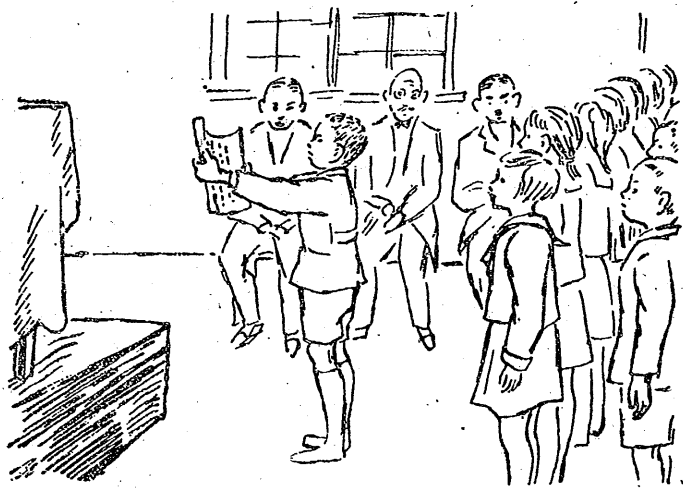
在校生たちがみんな、私たちのために送別の歌を歌ってくれた。その歌を耳にしながら、もつと下級生をかわいがってあげばよかったなと思った。

「かわいい弟たちよ、妹たちよ。みんな元気で、この学校を愛

してくれ。」

私が答辞を読んだ。けれども、思うことがすこしも書けていないことに気がついた。あれもいいたい、これもいいたいと思った。読んでいるうちに先生がたに対する感謝の念があふれてきた。それはなんともいえない、せつない気持ちであった。

受持の佐藤先生と、教室でお別れをした。先生は、



「おたがい、信じあえ。愛しあつて生きていけ。これがこの級の最後のことばだ。」とおっしゃった。

うれしいうな、楽しいうな、悲しいうな、気持ちをだいて、この日記のふでをおこう。

——高橋——

——高橋さんが、きょうの日記当番ですが、私にも書かせてください。きょうの感謝会はわすれることはできません——

先生がたがみんな、合唱してくださった校歌や、石井先生の手品や、森田先生と西野先生のバイオリンとピアノ合奏うな、はじめてのことなので、ほんとうにうれしく思いました。

なぜいままで、もっと先生がたとしたしくしなかったのだろうと、さんねんに思いました。先生がたのご幸福をおいのりいたします。

——園山——

楽しい六か年の思い出を残してくれたこの運動場、この校舎、あの農園、みんなありがとう。

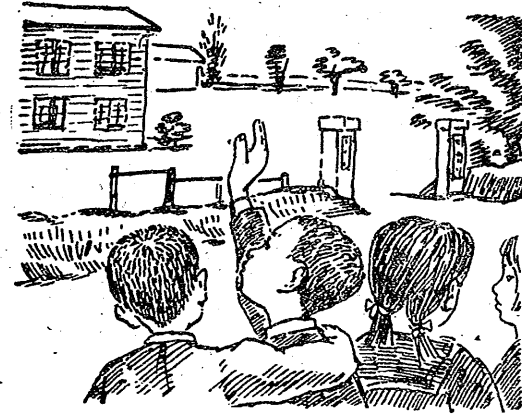
——田中——

なつかしい一年生。「ごくご」一の第一課「みんないいこ、ほんとうにみんないい同級生であった。」

「心に花をかざれ。」

○でつづんだ漢字は、「当用漢字別表」(教育漢字)にはいっていない漢字です。

境 (73)	恩 (55)	焼 (44)	特 (34)	穀 (26)	末 (4)
権 (74)	争 (55)	技 (48)	側 (37)	刀 (28)	残 (7)
栄 (85)	費 (55)	研 (51)	訓 (38)	必 (29)	板 (10)
要 (88)	測 (56)	究 (51)	江 (39)	初 (30)	置 (13)
健 (102)	寄 (56)	諸 (52)	仁 (39)	綿 (30)	府 (19)
康 (102)	宿 (56)	各 (52)	在 (41)	周 (30)	氷 (19)
潔 (109)	授 (57)	衛 (53)	標 (41)	囲 (30)	河 (19)
底 (109)	当 (59)	刊 (54)	準 (41)	投 (31)	起 (22)



○
新しい旅の門出、
希望をもって。
校門のかしの木よ、
母校よ、ばんざい。
草野

丸山

K160.8-1-15

國語 第六學年 下
Approved by Ministry of Education
(Date Aug. 23, 1948)

昭和二十三年八月二十三日翻刻印刷
昭和二十三年九月二十日翻刻發行
(昭和二十三年八月二十三日文部省検査済)
定價金拾八圓
著作權所有 著者兼發行者 文 部 省

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
翻刻者行 東京書籍株式会社
代表者 長 得 一

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
印刷所 東京書籍株式会社
代表者 長 得 一

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
發行所 東京書籍株式会社